

子どものための《兵士のものがたり》

日時：2014年3月16日(日) 11:00 開演 会場：東京文化会館 小ホール



欲しくてたまらないもの、一番大切なもの

マイケル・スペンサー

ちょっと想像してごらん！ 君が、車も電車も飛行機もない、ずっと昔の人だとしたら？ 君は何カ月ものあいだ、家族や友だちから離れて、大きな重いリュックひとつで旅をしているとしたら？ 君の唯一の友だちは、古ぼけたヴァイオリンだけ。

家までの長い長い道を、君はてくてく歩いています。おや？ 見知らぬ人に出会います。その人は、未来をのぞくことのできる魔法の本を差し出して、君の宝物のヴァイオリンと取りかえっこしよう、と言います。さあ、君ならどうする？

このコンサートでは、《兵士の物語》というロシア民話を、せりふと音楽の両方でつづっていきます。

欲しくてたまらないものを手に入れるために、一番大切なものをあげてしまったらどうなる？ お話の続きを一緒に探してみよう！

♪ストラヴィンスキー：《兵士の物語》

1918年、ストラヴィンスキーはすでにバレエ音楽3大作品を発表し、36歳の円熟期にあったが、第一次世界大戦の影響を少なからず被り、ロシア十月革命によって故郷にも戻ることができずにいたため、実生活は困窮のうちにあった。

そうしたなか、亡命先のスイスで書かれたのが、語り手、兵士、悪魔、王女を登場人物とする《兵士の物語》であった。戦時下という窮乏した状況のもとでの、最小限の構成による移動劇場のための作品ゆえ、それぞれ2人ずつの木管部(クラリネット、ファゴット)、金管部(トランペット、トロンボーン)、弦楽部(ヴァイオリン、コントラバス)、そして打楽器1人の計7人という独特かつ小さな編成を採用している。

「あらすじ」は以下の通りである——休暇中の兵士が故郷に帰る途上、ひと休みしてヴァイオリンを弾いていると老人(悪魔)が現れ、富を得る本とヴァイオリンとの交換を持ちかける。悪魔にヴァイオリンを教えていると、知らぬ間に歳月は流れ、もはや故郷は馴染みのものではなくなっていた(以上、第1部)。悪魔の本によって得た富にも飽き、旅に出た兵士は別の土地で、不治の病に臥せっている王女を知る。再び悪魔との賭けに勝ってヴァイオリンを取り戻した兵士は、王女に演奏を聴かせてその病を癒す。王女もヴァイオリンも手に入れた兵士だったが、望郷の念に駆られ、「国の外に出てはならない」という悪魔の警告にもかかわらず、故郷へ向かおうとする。そして国境を越えた途端、彼の魂は悪魔の手中に収められ、悪魔が凱歌をあげるのだった(以上、第2部)。

《兵士の物語》の台本は、スイスの友人である文筆家ラミュによるもので、副題には「読まれ、演じられ、踊られる」とある。ヴァイオリンの諧謔に満ちた旋律や打楽器の悪魔的なリズムが非常にユニークで、一度聴いたら忘れられない。ストラヴィンスキーは1918年の初演後、この作品を全5曲のトリオ版と、全9曲からなる組曲に編曲している。